

彷徨う勇者 魔王に花

沙藤 堇

Sumire Sato

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画
ひだかなみ

目 次



プロローグ

一、雪に溺れた娘を助けて恋をした

22 7

二、草原の覇者の勇者姫

51

三、満月の七日間

102

四、嘘と恋

122

五、サフラ研究序論

152

六、世界樹の花咲く刻

200

エピローグ

233

あとがき



242





彷徨う勇者
魔王に花



プロローグ

妾^{わらわ}の愛^{いと}しき、七人の子らよ。

今宵^{こよひ}も、星屑^{ほしくず}と緑の月が世界樹の枝を飾った。

いつもの通り、聞かせよう。

そうじゃ、我が夫^おにしてお前達の父。

この愛^{いと}しき首^{くび}が、かつて生きていた頃の話を。

* * *

エラルドと出会ったのは、妾^{わらわ}が奔放^{ほんぽう}な姫であつた頃じゃ。まだ人への変^{へん}化^けもままならぬ癖^{くせ}に、覚えたばかりの界渡りを試したくてたまらなくての。

深草^{フナグサ}色の満月が美しい夜に、我^{われ}ら魔^マの住まう炎^ヒなる荒野^{オセ}より、人間の住まう風渡^{フナカド}る草原^{ソウゲン}へ。

好奇心の命ずるまま、父上殿の目を盗んで飛び出したのじゃ。

かの地は美しかった。月は黄色く、草原^{さんぽう}がどこまでも続^つき、遠^{とほ}くに乾いた骨色^{かんぱ}の山峰^{さんぽう}が聳^{そび}える。

風は芳^{かんば}しく涼^{すず}やかで、黄金の陽射しは体を焼かぬ。それから、そう。空が青いのじゃ。骨喰^{ルリ}い蝶^{タテ}の羽の色を、もつと深く、もつと透明にした色と言えは良いのじゃろうか……。

あれが何ともいえず、優しい色合いでの。

ユーナカートはな、息をするのも忘れる程麗^{うるわ}しき景色が、惜しげもなく続^ついておる世界なのじゃ。

そこで、山の端^はを燃^もやす艶^{あで}やかな夕空よりも美しきものを、妾は見つけた。何だか分かるか？



ああ、ファルカ。お前は恋に関しては本当に鋭い。そう。彼じゃ。我が膝ひざの上で快活に笑う、この首。恋しき我が宝、エラルドじゃ。

かの地に辿りついた妾はな、ユーナカートユナカートの景色にすっかり夢中になって、白蛇の姿を取ったまま、あちこちを見て回っていたのじゃ。

お前たちも知っておろう？ 妾の本性は、荒野を吠える三つ首の狼と、大河を滑る八枚羽の白蛇と、海で嘆く百本角の山羊が、一体となったもの。白蛇の姿を取る事など造作も無い。

しかしな、白蛇というのが不味まずかった。小さな蛇に変わると、その分力も弱まる。

人間など、鋭い爪も牙も持たぬ、炎も雷も操れぬ脆弱な生き物だと侮あなづっておったのが運の尽き。

奴らは小賢しく徒党を組み、罨わなを張り、飛び道具などを使うのじゃ。

妾の姿を見て、不吉とか神の使いとか騒ぎおって、とうとう、小さな村の檻おりに妾を閉じ込めてしまった。

いや、驚くでないぞ子供達よ。確かに妾は、かつては魔帝の一人娘であつたし、今やその名を受け継いで玉座に座しておる。デイオゼ全土のどんな獐犷ぞうかうなグルであつても、跪ひざまずかせる事は容易い。

けれどユーナカートでは、デイオゼのように力を操れぬ。屈辱的な扱いに腸はらわたを煮焦がしたとて、村を消し炭にする力を得るには、月が出るまで待たねばならなかったのじゃよ。

しかたなく妾は、とぐろを巻いて昼寝をしておつた。ふてくされてな。けれど、夢と戯れまどろむ耳に、ふと、鈍色の檻の軋む音が響いたのじゃ。

顔を上げるとな、闇夜の髪に、深き緑の瞳。

見目麗しい青年が、優しい笑みと共に、扉を開け放つてくれていた。

己の代わりに自由になれと。

妾のように美しい蛇を捕らえるべきでは無いとな。そう、それがエラルド。

粗末ななりで、爪先は割れ、乾いた血がこびりつ

いておったけれど、その瞳は深緑の満月より清らかで、髪はどんな夜空よりも深い闇をたたえていたものよ。深くまろやかな、耳に心地よい声をし、明るく快活な笑みに、熱く固い掌をして、立ち姿など、凜と輝いて……

こらこら、レガート。寝るでない。

それ、エリゾナ。そなたの狼の爪でひつかいてしまえ。船をこぐ愚かな兄を起こすのじゃ。

さて。妾は、村外れの森へと逃げたが、やはりあの麗しき青年が気になっての。夜になり力が戻るのを待って、村の様子を見に行つたのじゃ。

そこで、胸の悪くなる光景を見た。

エラルドが、村人に虐げられておつたのじゃ。

突き飛ばされ、足蹴にされ、唾を吐かれておつた。

彼はもう氣を失つておつたのに、まだ打ち付ける拳も、嘲笑も止まないのだ。

ただ、小さな蛇を助けたというちっぽけな理由で。おお、アラン。そんなに怯えずとも良い。怖いな

ら、シャノの柔らかな山羊の腹に顔をうずめておれ。案ずるでない。怒りに打ち震えた妾は、すぐさま狼に変化して村人に襲いかかってやつたからの！ 奴らは、泡を吹いて逃げて行きよつたぞ。倒けつ転びつ、みつともない叫び声を上げながらな。

村人共を追い払つた妾は、氣を失つたエラルドの襟を啜えて、森に引き込んだ。狼の舌で頬を舐め、彼が目覚めるのを待つたのじゃ。

けれどエラルドはぴくりとも動かぬ。ただいたずらに時ばかり過ぎていく。このまま目覚めなかつたらどうしようと焦り、不安になった時、ふと妾は世界樹の種を持つている事を思い出したのじゃ。

我らグルの、唯一の食料にして命の源。

一年に一度飲めば事足りるが、無ければ干からびて死ぬ深紅の種。我らは、ひどい傷を負えば、世界樹の種を喰らつて癒す。ならば人間にも効かぬかと思ひ、藁にも縋る思いで飲ませてみたのじゃ。

するとどうじゃ。瞼が震え、あの麗しき深緑の瞳

が現れた！　そしてゆっくり妾の方を向き、首を傾かしげて、淡く、柔らかに微笑ほほえんだのじゃ！

『美しい狼おひやだな。俺おれを食べるのか？』

村人を脅おびやかしたのはこの姿じゃったと思い出した妾は、慌あわてて人の姿を取ろうとしたのだが、まだ未熟であつたゆえな……。上半身は上手うまくいっただのじやが、下半身は蛇になつてしもうた。慌あわてて隠かくそうにも、尾びが絡からまつて固結こくびになつて、動けないのじや。もう泣きそうだったわ。

むう、お前達。何がそんなにおかしいのじや。

ゲルド、お前あなたが叩たたくと床石とどろが割れる、そんなに笑うな。ああもう、静かにせい、喰くろうてしまふぞ！

……まったく。

そういうえば、エラルドも、泣きそうな妾を見て笑つておつたな。今のお前達のように、腹を抱はえて。

懐なつかしいの。エラルドは、存分に笑うと、立ち上がつて、まだ尾が団子だんごじゃつた妾を覗のぞきこみ、

『なるほど。さっきの蛇は、君だったのか。道理で

美しいと思つた』

そう言つて妾の肩に上着を掛けてくれた。

ユーナカートでは裸体とは隠すものだと、その時教わつたぞ。ゆえに、我らは服を着ておる。他のグル共は、装飾は付けたとて、服など必要とせぬがな。妾は、お前達の可愛かわいらしい姿をより華やかに出来るゆえ、これからも沢山作らせ、毎日着せてゆくぞ。おお、エリゾナ。あんまり姉あねばかり羨うらやましがるでない。お前の服も、充分愛らしいではないか。

さて、話が逸それたな。

美しいなど言われ慣れておつた妾だが、何故なぜかエラルドに言われると、頬は熱くなり、頭が真っ白になつてしまった。けれど、魔帝の一人娘として、あまり惚ほけた姿を晒さらす事もできぬ。胸を張り威厳を保つて、村では、そなたは喰くわれてしまったと思つてゐるだろう、そなたは自由だと、告げたのじや。

そなたはどこにでも行けるのだと言いながら、妾は何故か、寂しくてたまらなかつた。彼が遠くに消

え去るのは、胸が絞られるような苦痛だったのじゃ。
ところがエラルドは、いたずらっぽく笑いかけて、『それじゃあ、このやっかいな結び目を解いたら、君は俺についてきてくれるだろうか？』

そう言つて、両手を広げたのじゃ。

まるで世界中の花が、一斉に咲き誇つたような気がしたぞ。光は溢れ、妙なる炎獄鳥の歌声が、遙かな青い空の果てまで鳴り響いたかのようじゃった。妾は領いて、どこまでもついて行くと約束した。

我が誇りと名誉にかけて、そなたとそなたの自由を守り続けると誓つたのじゃ。

そうして、我らの自由で幸福な旅は始まつた。

世界樹の種を腹に収めたエラルドは、他の者とは比べ物にならない生命力を手に入れておつた。

ゲルより脆弱な人間にとって、かの深紅の種は、体の造りを変えてしまう劇物だったのじゃ。

常人の何倍もの腕力を手に入れたエラルドは、しかし力に傲る事も、酔う事も無かつた。ただ淡々と、

生きる為に力を利用するのみじゃつた。

我らは、日雇いの傭兵として金を稼ぎ、心の赴くままに目的の地を決めた。

まあ、ユーナカートで傭兵を雇うとしたら、大抵盗賊避けかゲル絡みじゃ。人に変化する術を得た妾がおれば、敵などあろうはずも無い。

吹きすさぶ風のように素早く走り、揺らぐ木の葉の気配までも掴み、岩棚すら碎くと言わしめた我らは、渡りの傭兵として大いに評判になつた。

何じゃ、ゲルド。また武勇伝を聞きたいのか？

牝牛の頭を持つた巨人を殴り飛ばした話も、森の木々と見分けがつかぬ姿をした大蜥蜴に、色水をかけて見つけ出した話も、昨日おおいにしたであろう。分かつた、分かつたよ。

明日はとおきおきの、砂を掘りオアシスを干上がらせた、砂漠の大土竜の話をしてやるから、な？
気ままに旅を続けた我らは、様々な街をめぐり、様々な物に触れたよ。

磯^{いそ}の匂いと波音、威勢の良い商人の声に満ちた海辺の街は、どんな国の品も揃^{そろ}つておつた。

ディオゼに似た荒野や砂丘の中に、突然現れる砂漠のオアシスは、どこより眩^{まぶ}しく緑が潤^{うる}つておつた。

飲まれそうな程に濃密な森が広がる、険^{けわ}しき山。

その隠れ里で作られた細工物は繊細で、まるで生きてゐるかのようにやつた。

果てなく広がる草原は花々を抱き、風が清々^{すがすが}しく渡つておつた。遅^たしき馬が、騎士と心を通わせ、何とも気持ちよさそうに駆けていたな。

霧の漂^{ただよ}う湖のほとりには、建てられたばかりの城があつた。月の似合う、しつとりと風情ある城じやある国の都は、石畳^{いしだたみ}に色の違う石を使つて、絵を描いていた。街自体が、芸術そのものじやつた。

雪深き山峰は静謐^{せいひつ}で、音が無かつた。

小さな山小屋で弾^{はじ}ける暖炉の火は、優しい子守唄^{こもりうた}じやつた。粗末な部屋だというのに、何故か、他に過ごしたどの部屋よりも暖かく感じたよ。

国の形もそれぞれでな、グルを善^よき隣人として歓迎している土地もあれば、国をあげて退治^{はげ}に励^{はげ}んでいる土地もあつた。

いい事も、悪い事も沢山あつたが、思い返せば、全てが楽しかつたよ。

エラルドが、いつも隣で笑つておつたからな。

しかし、出会つて三年と少しを数えた時に、妾は突然、彼に旅の終わりを告げられた。理由も無く、一方的にな。妾は怒り、叫び、荒れ狂つたよ。

何故じゃ、理由を聞かせよ、言わねばそなたの喉^{のど}をきつく抱き、くびり殺してやるとまで言つた。

しかしエラルドは何も語らぬ。妾に殺されるのなら、それはそれで満足などと、笑つておつた。

妾は地を割り、空から雷の雨を降らせ、炎の大蛇に囲ませた。全ての本性を現し、幾百の瞳を燃え盛らせて睨^{にら}んだ。それでもエラルドは笑つておる。

怒りにうねる蛇の頭を撫^なでて、どんな姿でも妾は美しいと笑ひよる。

どれ程強大な力を以てしても、動かせないものがあるのだと、妾は、あの時初めて悟った。

妾では、エラルドの心を動かせぬ。彼を引き留められぬ。赤禿げた生まれだての雛よりも、獣に蹂躪される獲物よりも、妾は無力じゃった。

とうとう人の姿に變じ、顔を覆って泣きだした。

もはや、妾はエラルド無しでは花の色も霞んで見えるのじゃ。そなた無しでは生きてゆけぬ、何でもするから置いて行くなと、妾を殺さないでおくれと笑えるであらう。

涙ながらの命乞いなど、腐るほど聞き流しておった妾がじゃ。卑劣なグルに陥れられ両手足を刻まれても、嵐そのもののグルに骨の碎ける程もみ絞られても、涙の一滴たりとも零さなかった妾がじゃ。たった一人の人間の男に泣かされ、胸に縋って懇願する事しか、出来なかった。

けれど、妾の涙に、どんなにおぞましき姿を見ても笑っておったエラルドが、不思議と唇を噛んだ。

胸が痛むかのように眉を寄せて、立ち尽くし……突然、妾を、抱きしめた！

すまない、すまないと繰り返しながら、妾の背を優しくさすり、泣かないでくれと囁いた。

降参だと。全て話すから、どうか笑ってくれと頭を撫でてくれたのじゃ。妾は、何が何だか分からぬまま、ただエラルドに嫌われていないと分かり、今度は安堵で大泣きしたものよ。

エラルドは語った。別れの理由を。

かの地に伝わる、古き言い伝え。

『千年に一度、七日間だけ、異界より巨大な樹が現れる。その花が咲く前に、生贄千人を捧げなければ、世界はグルに滅ぼされる』

生贄を差し出す責務を負っていたのは、ジルドという王国じゃった。樹が現れるのは、必ずジルド王国の草原と決まっていたからな。

かの国の王は、弱小ゆえ他国から奴隷を買う事もままならず、さりとてむざむざと千人の国民を渡す

事も嫌がった。騎士をかき集め、傭兵を募り、愚かにもグルと戦う事を選んだのよ。千年の間に、グルがどれ程恐ろしいのかも忘れてな。

エラルドが集めた噂では、戦う事を決めたのは、つい近年即位した若き王だったそうじゃ。

老王の悪法を廃止したと言って、大いに讃えられていたのじゃ。先代は、身寄りの無い子供を引き取り、生贄の役割をあらかじめ負わせて育てて、我らに差し出そうという政策を用いておつたらしくての。エラルドも、生贄の一人だったのじゃ。

彼は、グルに捧げられる為だけに、故郷の村で生かされ、暮らして来たのだと、その時初めて知った。妾が助けたゆえ、エラルドはもう自由の身。

けれど、同じ運命を課せられた人間が、他にも千人存在する。

エラルドは、彼らの事が、ずっと心にかかっている。若き王の姿勢に、他人事では居られず、グルと戦う軍に志願するつもりだったのじゃ。

ゆえに、妾に別れを告げた。

妾を同胞殺しにさせない為に。

けれども、グルである妾は知っておつたよ。

千年に一度、贄を要求するのは、ただの娯楽ではない。生きる為に必要な、狩りなのだ。

異界より現れる樹とはな、世界樹の事じゃ。

ほれ、お前達の塔の上からいつも見えているだろう。山峰すら腹の下に置く、あの岩のような樹。

あの樹の花を咲かせる為に、グルは人間を求める。世界樹は、開花の時期になると、七日間だけ、二つの世界にまたがり『口』を開けるのじゃ。

我らグルはそこに人間千人を放り込み、喰わせる。すると、花が咲き、実を付ける。

実に包まれた種を喰らい、グルは力と命を得る。

『約束の千年』

我らは、世界樹が花咲く時期を、そう呼んでおる。大切な時期じゃ。ディオゼ全土の、グルの命がかかっておる。世界樹の花が咲かねば、我らは飢えて

死ぬしかないのだから。

妾はエラルドに、贅が何故要るのかを説明した。

どうあつても、行わねばならぬ、自然の摂理だところ。ところがエラルドは、とても賢い男じゃった。

人間の何が、世界樹の花を咲かせるのか、それを突き止めようと言つたのじゃ。

血ならば、死なぬ程度に集めれば良い。骨ならば、墓場から持つてくれば良い。髪ならば切れば良い。

共に考えてくれぬかと、一緒に生きたいのだと。

『もしも全てを解き明かしたら、俺の、世界一可愛なお嫁さんになつてくれないかい？』

輝く光の洪水で、世界が滅亡するかと思つたぞ！

そう、無知な妾は、恋をした相手に恋をされる為に生きとし生ける者は生まれ出ると、その時ようやく知つたのじゃ！

おお、しまった。力を入れ過ぎたの。天井から鱗蜘蛛ゾラルチユラが落ちてきよつた。ラウプ、食べるでない。それは硬い。芋虫いもむしをやるから、そっちにおし。

さて。我らはめでたく心を通わせ、ディオゼへと渡つた。普通の人間はディオゼの大气に耐えきれぬが、エラルドは、世界樹の種を飲んでおつたゆえ、まるで生まれ故郷のように過ごす事が出来たぞ。

エラルドときたら、最も急ぐべき世界樹の研究を後回しにして、真つ先に父上殿に挨拶あいさつをしに行つてくれたのじゃ。妾を花嫁にしたいとな。

父上殿ときたら、突然の事に泣くわ喚くわ、物を投げるわでそれはもう大変で……。

なんじゃ、ゲルド。つまらなそうな顔をするな。

レガート、きさま感心するふりをして寝ておるな？

よし、娘たちよ、許す。やつてしまえ。

おほん。我らは、世界樹の枝の上に研究室をかまえた。閉じている『□』のすぐ近くに。

ユーナカートとディオゼを行き来し、何が必要なのか、何が花を咲かせるのか、研究に明け暮れたのじゃ。けれど『□』が開かない状態では、どうしても限界がある。

我らの研究が完成しないまま、あえなく世界樹は草原に現れ『□』は開いてしまったよ。

願い空しく、ジルド王国とゲルの戦争が始まった。ジルドの兵はゲルを滅ぼさんと戦い、ゲルは手当たり次第に人間を攫い、世界樹の『□』の中に放り込み、数多の血と骨が失われていった。

しかし、不幸中の幸いと言うべきか、『□』が開いた事で、研究もまた容易になった。

我らは寝る間も惜しんで戦場の死体や、怪我人から集めた血、エラルド本人の血や髪で実験を繰り返した。そして、七日目によく『世界樹の開花に必要なのは、草原出身の人間の血、百人分』だと弾きだしたのじゃ。

千人の人間を放り込めば、確率的に、草原出身者も百人は入っているものな。分かってしまえば、随分無駄な事をしていたものよ。

我らは研究成果を抱え、ジルド国王の下へ駆けた。稀代の傭兵として築いた評判が、我らを助けたよ。

すぐさま謁見を許され、若き王の前で全てを語る事が出来た。研究の成果に王は頷き、我らを讃え、褒美をやるうと別の部屋へ導いたのじゃ。

我らは愚かであった。我らは呑気であった。畏だったのじゃ。

案内された部屋には、王直属の騎士が待ち構えておった。研究をしている最中に、我らが世界を行き来している所を、人間に見られておったのじゃよ。妾がゲルだとばれておった。

最初から、何もかも破壊しつくすつもりで暴れればよかったのじゃがな。

エラルドが捕らえられて、動けなかった。

妾は十重二十重の頑健な鎖でがんじがらめにされ、床に引き倒された。金冠騎士が巨大な戦斧を振り上げ、もはやここまでかと思った時じゃ。

エラルドが、己の腕を切り落として兵より逃れ、妾の前に身を投げ出した。

あつけない程簡単に、胴と頭は切り離されたよ。

まだ、耳に残っておる。忘れるものか。

肉が断たれる音。骨の碎ける音。

妾が幾度も触れ、腕を回して甘えた首が、吹き出す生温かい血で真つ赤に染まり、地に落ちた。

……首になつても、ほんのひと時、エラルドは生きておった。

世界樹の種は、もはやエラルドを、人として有り得ぬ所にまで、押し上げてしまつておつたのじやな。

妾は信じた。まだ間に合う。まだ、助けられる。

研究の過程でな、我らは、世界樹の種が人間の生きた血で力を得る事を突き止めておつたのじや。

エラルドの頭と胴の切り口をつけ、幾人かの生きた血を飲ませれば生き延びられる事を、知つておつた。

鎖を引きちぎり、エラルドの首を抱きしめ、妾は脅した。血を超越せと。

本性を現し、氷塊を降らせ、鋭き岩山を生やした。けれど人間は皆、血を奪う前に自害した。

一滴の生き血も手に入らず、ただ時ばかり過ぎ、

エラルドはどんどん冷たくなつてゆく。

妾は、焦り、叫び、とうとう泣き崩れた。エラルドに立ち去られそうになつた時と、同じようにな。

妾が地に伏し、頭を下げたのは、後にも先にも、あの時だけじや。

どうか、誰ぞ血を分けてくれぬかと。

その為なら、何でもしようよ。

人間は口を揃えて言つたよ。

『ならば死ね』

とな。

誰に助けられる事も無く、幾百の罵声ばせいを浴びたエラルドは、妾の腕の中でくちづけを乞うた。

妾は望みに応えて、両手で首を持ち上げた。

我らは血にまみれ、涙に溺おぼれながら、身を焦がすような激しいくちづけを交わした。

エラルドは、笑つていたよ。快活に。いつも通り。

『愛してるよ、ソロナ。君は俺の自由そのもの』

それが、最後の言葉じゃった。

笑んだ首は、陶器のように艶めいて、二度とまばたきしなかった。温度を失い、声も吐息も消えた。

妾は世界を、呪った。

強く、激しく、命の限りにな。

狂乱し、エラルドの首を抱えたまま飛び回り、十の都を焼き、百の村を碎き、千の森を砂とした。

命という命をすり潰し、ものみな全て滅ぼさんと吠えた。

けれど、皮肉な事にな。突然花が咲いたのじゃよ、世界樹の花が。一斉に。

我が夫の胸を奪った人間共が、反逆者としてグルに引き渡し、世界樹の『口』に放り込んだ瞬間だったと、後から父上殿に教えてもらった。

それを聞き、妾は悟った。研究が正しかった事を。世界樹を咲かせる方法は、二つあったのじゃ。

『草原出身の人間の血、百人分を与える』

もしくは、

『世界樹の種を得た草原出身の血一人分を』

エラルドは、草原に生まれ育った人間。

研究するうちに、彼一人で世界樹を咲かせられる事に、気付いてしまったのじゃよ。

エラルドは失えぬ。ゆえに隠した。

けれど、どんな偶然の悪戯か、悪意の為せる業か、世界樹はエラルドを喰らい、花を咲かせた。

その瞬間、グルと人間が争う理由も消え去った。けれど妾は気が済まぬ。湖を涸らし森を焼き、人間共を全て滅ぼさんと吠えた。

だが、妾は止められてしまったよ。

人では無く、父上殿や、他のグル達にな。

人間全てを滅ぼしてしまえば、次の千年に世界樹の花を咲かす事は出来なくなる。

生きる為には人間を滅ぼせぬ。

ゆえに、今まで人間に向けていた牙や爪、雷や炎を、全て妾に向けて、ディオゼに引き戻したのじゃ。

消えゆく中で、妾は叫んだ。

『呪いあれ！ 呪いあれ！ 千年先に、再びお前達のもとに現れよう。そして、お前らの子をずたずたに引き裂き、獣の餌^{えさ}にしてくれる！』

ディオゼに戻った妾は、ユーナカートへ行かぬように魔術を施^{ほどこ}され、首と共に部屋に閉じ込められた。せめて我が夫の胴を取りに行かせよ、と脅したが、世界樹の『口』に飛び込むのは自殺行為じゃ。

妾に残されたのは、愛しき首のみ。

どんな言葉も、贈り物も、妾の心を溶かす事は出来ぬ。

応えの無いくちづけを繰り返し、そのぬくもりを思い出しては、涙に溺れるように暮らしていた。

後を追う事すら、考えた。

ああ、泣くでないアラン。ほれ、兄の膝に乗せてもらえ。エリゾナも、隠さんでいい。撫でてもらえ。安心せよ。そんな妾を救ったのは、誰だと思う？
そう、他でも無い、お前達なのじゃ！

そなたらを身ごもっている事が分かった時は、嬉^{うれ}しかったのう、本当に……。

あたりの景色が違って見えた。風はかくわしく、夜空は清らかで、月は艶やかじゃった。

生きていける、そう繰り返しながら、腹を撫で、泣いたものよ。

エラルドの首を手に載せ、広間で炎舞^{えんぶ}を七日七晩踊りつづけた。

そうして生まれた七人の子らが、お前達じゃ。

エラルドと妾の、愛する子供じゃ。

さあ、おいで。お前達の柔らかな頬を、この母に撫でさせておくれ。

頬^ほずりをさせ、抱きしめさせておくれ。

仲良く順番に並んだら、一人残らず、額にくちづけをやるからの。

ほらほら、押すのは無しじゃ。ずるをした子は、一番最後にするぞ？

ああ、お前達を見ていると、最後に吐いた呪いの

言葉が、いかに残酷だったかと胸をつくのう。

こんなにも愛しい子供達を、引き裂くなど……。

よいか。妾がこの世で最も愛した男は、人間じゃ。

しかし、その男を殺したのもまた、人間。

妾はまだ、ユーナカートをどうしたいのか、分か

らぬ。だが、子供達。

お前達にはそれぞれに道があろう。

誰のものでも無い道を、真っ直ぐに歩くがいい。

そして、妾にいつか道果ての景色を見せて、人間

とは何かを、教えておくれ……。

* * *

そして、時は流れ。

再び『約束の千年』が迫ろうとしていた。

魔帝は言う。

それぞれに育ち、魔王の名を冠せし子らに言う。

「この恨み、未だに胸の奥で燻^{くすぶ}っておる事を隠すまい。けれども愛しい子供達、お前達の血は、半分は人間。愛しきエラルドの血。お前達が見極めておくれ。ユーナカートは、美しいのか、醜^{みにく}いのか。人間は、生かすべきか、滅ぼすべきか」

グルと人間の血を受け継いだ、七人の子らは領いて、人に変化し、散っていった。

面倒臭^{めんどくさい}がりの長男レガートは海辺の街へ
美しい長女ファルカは砂漠のオアシスへ
誇り高い次女シャノは険しき山森^{とりで}の里へ
怒りっぽい次男ゲルドは広い草原の砦^{とりで}へ
食いしん坊の三男ラウプは霧の湖の城へ
妬^やきもちやきの三女エリゾナは華の都へ
甘えんぼの末っ子アランは雪山の小屋へ

三男のラウプはすぐに帰って来た。雪の季節に。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。